

明治大学 国際日本学部

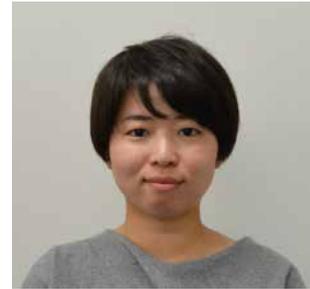
国際日本学部は、世界から注目されている日本文化に対する深い理解と優れた語学力を有し、かつ異文化に対しても柔軟な理解力を兼ね備えた人材を育成。日本人学生にとっても外国人学生にとっても、魅力あるカリキュラムを揃えています。



■大学生
石田葵さん



■先生
鈴木賢志先生



■卒業生
濱本春奈さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

明治大学国際日本学部の特色を教えてください。



■先生

実は私自身は「国際日本学」という学問はないと考えています（笑）。「では、国際日本学ってなんだ？」と疑問に思いますよね。この名前には「日本を国際の視点から見つめ直し、その魅力を再発見して、世界に発信する学部になりたい」という思いが込められているんです。そのために、多岐にわたる勉強ができるようカリキュラムが組まれています。ざっと専門領域の名前を紹介すると「ポップカルチャー

研究領域」「視覚文化研究領域」「社会システム・メディア研究領域」「国際関係・文化交流研究領域」「国際文化・思想研究領域」「日本文化・思想研究領域」「日本語研究領域」「英語研究領域」があります。この名称を見ていただければわかるように、国際日本学部では、幅広くあらゆる分野について学ぶことができるのです。そこに文系理系の壁はありません。例えば「日本のマンガを世界に紹介しよう」と思った場合、「絵の描き方を比べる」「販路を考える」「宣伝手法を考える」「過去の文学や日本の伝統とともに紹介する」といった手段が考えられます。その中から学生がどんな手段を選んでも、それに応え、サポートできる、多岐にわたる様々な学びが用意されています。また、学生の学びの

意欲を支え、導くために、国際日本学部では、ポップカルチャーやものづくり、社会システムなど多様な分野の「とんがった」専門家もそろっています。その多様性を活かして、「国」の違いだけでなく「文化」の違いがもたらす創造的な発想や活動を生み出すのが、この学部の狙いでもあるのです。社会に出ると、先ほど述べたように、あらゆる可能性を考慮して仕事を進めることになります。文化、経済、経営、時には統計などの理系の要素も必要となります。文系理系にかかわらず、広い視野で物事を捉え、考えなければ、社会で活躍できないのです。国際日本学部なら、そのための力を充分に身につけることができます。

“国際”日本学部ですから、とても多くの国々から留学生を受け入れ、専門家を招いています。学部内だけで、インターナショナルな交流が可能です。「グローバル化」に注力している多くの日本の大学の中でも、かなり早い段階からこういった環境を整えていた学部であるという自負があります。ただグローバル化を推し進める大学と大きく違うのは、国際日本学部に、例えば「アメリカの専門家」「中国についてだけ研究をしている教授」といった研究家はいません。どんなバックグラウンドを持った方であれ、「日本を世界的な視点で見る」「世界から日本を見る」というのが国際日本学の共通ルール。必ず日本文化との比較、発信することがルールとして共有されているのです。

鈴木先生のゼミではどのようなことを学ぶのでしょうか？

■先生

「北欧と日本の社会システム、国民性の比較分析」というテーマを扱っています。私自身、国家システムと国民性、国家イメージを研究対象にしています。具体的にはスウェーデンの社会システムや、文化などを日本のものと比較するということをしています。ゼミでは毎年9月に、スウェーデンに研修に訪れます。そこでは現地の高校生に対して、日本をプレゼンテーションするという活動などを行います。

■卒業生

海外研修は希望者が参加するのですが、ほぼ毎年全員が参加しています。私は現地で同年代の学生たちと話し、彼らが自分から政治に進出して、社会を変えようとしている姿に驚きました。日本の学生にとって政治というのはそこまで身近な存在ではありません。どちらかという社会は「変えられないもの」という認識があるくらいです。でもスウェーデンでは同年代が、「これからの社会は自分たちが担っていくんだ」という意気を持って頑張っていてとても刺激を受けましたし、社会や文化のいい比較ができたなと感じています。

■大学生

私は鈴木先生のゼミのスウェーデンへの研修旅行が、明治大学国際日本学部に入學しようと思ったきっかけでもあるんです。アルバイトをして、自分自身でもスウェーデンを訪れましたが、旅行では出会えない、より多様な人とふれあい、スウェーデンの人や文化、社会を知ることができました。私にとっても、すごく刺激を受けられる時間でした。



■先生

これまでは卒業論文を課していましたが、とても面白いテーマで卒論を書いた学生も多くいますよ。例えば、スウェーデンの家具量販店と言えばIKEAが有名です。これと、日本のニトリは、価格の付け方や製品のデザインが似ていると言われることがあります。ある学生はこの2つの企業を取り上げ、説明書を比較したのです。似ていると言われている2つの企業ですが、説明書には大きな違

いがいくつもありました。特に顕著だったのは、ジェンダーについての考え方。IKEAの説明書は、よりジェンダーフリーを意識した構成になっています。その点に、世界と比較してまだまだジェンダーに対する考え方が遅れていると言われる日本との明確な差が出ているのです。このように、家具の説明書一つを取っても、世界と日本が比較できます。その比較をする時、学生は国際社会の中で日本の社会や文化がどういう立場なのかをまざまざと見ることになるのです。すると、いままで「当たり前だ」と思っていたことが、実は世界にとっては「当たり前ではない」とわかります。その気づきがあると、それまで意識していなかった日本の姿が見えてくるのです。

■大学生

この学部で勉強をすると、本当に「知らなかった日本の姿」を発見することがたくさんあります。入学して学びたかったことが、より広い視点を得ながら学べます。

■先生

今年のゼミで行ったのは、スウェーデンの小学校の教科書を読み解くという内容です。歴史を扱ったのですが、教科書には「なぜあなたは歴史を勉強すべきなのか」ということが明記されています。「過去に起こったことを学ぶことで、将来に同様のことが起こったときに対処する方法を学ぶため」と書かれています。学生たちはそれを読んで、「自分たちは小学校、中学校でそんなことを



考えて歴史を勉強していただろうか」「受験のためだけに事実を詰め込んでいたのではないか」と振り返ります。その時、日本とスウェーデンの教育のとらえ方、そこから発展して社会のあり方の比較ができるのです。

同じように、SNSに対する考え方を見ても社会について比較ができます。日本では、ほとんどの学校がスマホ禁止です。スウェーデンでも、小学生に対して「注意して扱わないといけません」と教えるのですが、同時に「世界に対して発信できる貴重なツールになります」ということも伝えます。小学生ですから、選挙権はありません。でも、政治に対して発言できる権利がないわけではない。そのためのツールとしてSNSが使えるよ、と教えるのです。「公園を作りたい」と考えたら、みんなで話し合ってどうするか考えるためにFacebookでグループを作って議論してみるという方法があるよ、と伝えます。あるいは「SNSを使ってみんなに呼びかけて、地元の政治家に話をしに行こう」「デモを行おう」という選択肢も書かれています。日本では考えられないと驚きます。「だからこそスウェーデンでは高い投票率があるんだな」と気づく学生もいます。そして「日本で取り入れるなら、日本の文化や習慣を考慮して、どうするのがいいだろうか」というところまで考える学生もいます。すると、疑問に思ったことや、やろうと思ったことをよりよく知るため、追究するために学ぶべき必要な知識は何だろうと考え、そのための講義を探し、受講するのです。そして自分の考えをより洗練し、世界に発信する方法を身につけていきます。これが国際日本学部で学ぶことの面白さなのです。

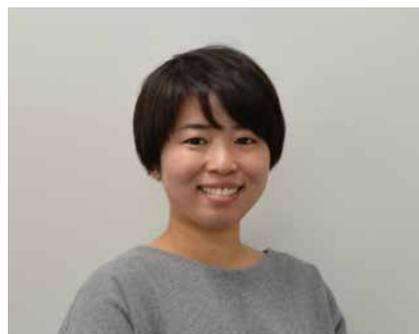
日本だけを見ていると「日本にないものはあきらめるしかない」という発想になりがち。他国を知れば、「ないものをいかに作るか」という方法を考えることができます。もちろん、いい面と悪い面があります。それを判断して、日本をよりよくするためにはどうするかを考えていくのです。

その繰り返しで、「いま私たちが日本で相対しているものに、絶対のものはない」と気づけば、視野も考え方も広がります。それができる人が、最初の話に戻りますが、社会で活躍できる人なのだ。私たちが考えているのです。

お二人が国際日本学部に入學しようと思った理由を教えてください。

■卒業生

私は高校生で留学した際の経験がきっかけになりました。アメリカにホームステイしたのですが、ホームステイ先で日本のことを自分の言葉でうまく紹介ができなかった。それがとても悔しくて。「もっと自分の国のことを、世界に発信できるようになりたい」と思うようになったんです。それでいろんな大学を調べていたのですが、多くの大学は「日本で、外国のことを学ぶ」というスタンスでしたが、明治大学の国際日本学部は、先ほど先生がお話をされた「国際的な視点で日本を見つめ、世界に日本を発信する」というスタンスです。「ここしかない」と入学を決意しました。



■大学生

実は私は、マンガがきっかけなんです。高校生の時に愛読していたマンガにスウェーデンの社会制度や文化が取り上げられていて「こんな素晴らしい国があるんだ」と興味を持ちました。それでスウェーデンのことを学べる大学をネットで探し、鈴木先生の研究室にたどり着いたのです。最初から、明治大学の国際日本学部に入學して、鈴木先生のゼミに入り、スウェーデンのことを深く学びたいと思っていました。

入學してくる学生さんの特長はどんな点でしょうか？

■先生

国際日本学部という名前のおかげか、やりたいことを明確に持って入學してくる学生が多いです。法学部や理工学部という一般的な名称の学部だと、高校生が両親や学校の先生に「この学部で勉強がしたい」と話せば、その時点で学校で学ぶことや社会に出てそれをどう活かすかというイメージができるので、納得もしやすいでしょう。しかし「国際日本学部に入りたい」と言われても、たぶんピンとこない。「そこで何をやるんだ？」となる（苦笑）。まず入學したいと思った時点で、高校生は「どんな勉強ができるんだろう」と思って、しっかりとカリキュラムや研究領域を調べているはず。そこでやりたいことが見つかって、志望の意志を固める。そして、両親や学校の先生に進路の話をするときに「国際日本学部で勉強したいこととは」「将来は学んだことをこう活かしたい」という話をするようになる。それだけのステップを踏むわけですから、自ずとやりたいことは明確になってきます。

実際に国際日本学部は、最初にお話ししたとおり、やりたいと思ったことを何でも学べるカリキュラムがそろっています。ですから、新しい刺激も多いですし、どんなことでもやりたいと思えば、広く深く追求することができる。実際に、入ってから新しい分野に興味を持って、専門領域を変える学生も多くいます。

■大学生

「スウェーデンのことが学びたい」という気持ちで入ってきた私も、ある授業で聞いた話があまりに面白く、強い興味を持ったので、ゼミを選択するときに「入學当初の初志を貫徹して鈴木先生のゼミでスウェーデンについて学ぶか、それとも新しく興味を持った分野に進むか」とすごく悩んだんですよ。

■卒業生

2年生の時に留学に行く人がとても多いので、それを機に専門とする分野を転換する人も多いですね。やっぱり海外に行くと、目線も変わりますし、視野も広がりますから。国際日本学部にはそういった学生の変化にも対応できるカリキュラムがそろっているので、いろんなことを学ぼうと思

えるというのもあります。

■先生

高校生までの人生で「やりたい」と思ったことって、やはり狭い視野の中で考えた結果にしか過ぎないわけです。この学部で世界に触れ、そしていままで知らなかった日本の姿を知って、新たに興味が出ることはいいことです。

■卒業生

あと国際日本学部では、英語を学ぶ人は多いです。ただ、それは英語が得意であるとか、好きであるということが理由ではないと思います。日本のことを世界に発信しようとする、やはり英語が話せるのが一番の近道です。苦手でも、英語は勉強するというスタンスです。

■先生

そうですね。英語だけで行う授業もありますし、留学生もたくさん受け入れています。国際日本学部では、英語はとても身近で勉強を進める上では必須の言語になります。

●大学生活について

国際日本語学部ではどのような学生生活を過ごしていますか？

■先生

多くの学生が留学を経験します。カリキュラム上、必ず留学しないといけないということではありませんが、なるべく参加するようにと話しています。年々参加者は増えていますね。提携先の大学への留学や、交換留学のプログラムが充実していますし、海外でのインターンシップのプログラムもあります。中でも人気なのは、アメリカのフロリダ州立大学で行われるテーマパークでのインターンシップ・プログラムです。毎年、40人程度の定員に応募が殺到しています。



■卒業生

留学は空いた時間に観光もできますし、世界を見ることができるので、とても貴重な時間だと思います。都会に留学すると刺激も多いです。私は都会ではなく、インディアナ州のインディアナ大学パーデュー大学・インディアナポリス校に留学しました。理由は、じっくりと勉強できる環境に身を置きたかったから。先ほど話した、ホームステイの時の悔しさを挽回できるようにしっかりと英語でのコミュニケーション能力を身につけようと思ったんです。

■先生

大学の提携先ではあるけれど、珍しい学校を選んだなと思いましたね。留学はもちろん、そこにただ身を投じるだけでも面白い経験はできる。でもやはり目的を明確に持って留学すると、成長できる幅も大きいです。

■卒業生

留学先ではコミュニケーションの授業を取る人が多いと思います。私は、それにプラスして、現地で日本文化を学んでいる学生達の授業に参加しました。そこで自分が日本について紹介したり、社会や文化の違いを議論することで、当初の目的に近づけると思ったんです。

ただ、留学先の授業は想像以上に大変でした。200～300ページの教科書を読んでから授業に来ること、といった大量の宿題を課す授業がほとんどです。速読ができなかったので、必死になって課題箇所を全部読み切って授業に向かっていました。おかげで帰国してから英語に対しての抵抗感は

なくなりました。苦労したけど経験したことが生きてるんだと思います（笑）。

■大学生

私は留学には行きませんでした。日本と海外を比べたい、日本から海外を見たい、というのが私の学びたい方向性だったので、海外に行く必要性がなかったんです。ただ、先ほどお話ししたように、スウェーデンに興味を持ったのがこの大学に入った動機だったので、アルバイトをして2回、個人旅行で現地に行きました。それはとても良い経験になりました。ゼミの研修旅行は3回目の訪問になります。毎回、自分の立場も出会う人の立場も違うので、相手の反応や話す内容も違う。それもまた刺激になりました。



明治大学のキャンパスでの学生生活について教えてください。

■大学生

中野キャンパスは国際日本学部には最適なロケーションだと思います。ポップカルチャー関連の研究も多い学部なので、フィールドワークにはとても便利です。ただ昼食が…

■卒業生

周りに企業も多くて、大学も複数校ありますから、お昼は激戦区ですよ（笑）。近隣の企業や大学から明治大学の食堂を利用しにやってくる人もいますから、食堂もたいへんな賑わいでした。学食は安くて早いから人気があります。

■先生

明治大学の食堂は校舎も新しいし、入りやすいというのも人気の理由かもしれないですね。

■大学生

校舎はすごく綺麗で過ごしやすいです。私が特に気に入っているのは2階の多目的室とパソコン室の間にあるスペースです。樹が植えられていて、席が4つだけ設置されているんです。とても静かなところで、講義のない時間などはそこで本を読んだり課題をやったりしています。

■卒業生

私は国際交流ラウンジによく行っていました。国際交流学生委員会にも入っていて、日本語を教えたり、イベントを開催したりして、留学生と交流していました。留学生との距離感が近いのも国際日本学部の特長です。

●就職活動、仕事について

就職活動はどのようにして進められましたか？

■卒業生

私はもともとインバウンドがやりたいと思っていました。海外から日本に人を呼んで来るという仕事です。国際日本学部で学んだことも活かせますし、もともとの動機であった「英語で日本のことを紹介したい」という想いも叶います。それで、最初は旅行業や航空サービスなどの観光業界、関連して町おこしなどのインフラまで幅広く視野に入れていたんです。その中で、徐々に焦点が合ってきたのが、旅行業でした。就職したのは、旅行代理店。現在は、シニア向けのツアーを催行している会社で、添乗員の仕事をしています。欧州担当になったのは、きっと鈴木先生のゼミ出身でスウェーデンについて研究史、実際に訪問したことがあると面接で話したからですね。仕事では、研修旅行の時とはまた違った視点で世界の国々が体験できるのが面白いです。仕事のやりがいは、何と言っても「旅行に来てよかった」と言ってもらえた瞬間です。まだまだ日本人が知らない世界の

魅力を、多くの人に紹介したいなと思っています。ただ、これはアウトバウンドの仕事です。将来は、今の経験を活かして、入社時の目標であったインバウンドの業務に就きたいです。

■大学生

私はいま就職活動中で、方向性に悩んでいる最中なんです。そういう具体的なお話しが聞けると、とても勉強になります。ちょうど旅行業にも興味を持ちはじめたところなんです。私は新しいもの好きだから、メーカーなどの先端分野にも興味があります。いろいろ幅を広げて、アタックしようと思っているのですが、中野にキャンパスがあると都内のどこへ出かけるのも交通の便が良くて活動しやすいです。

● 5年後に向けて

5年後に皆さんは何をしているでしょうか？

■大学生

私は北欧も好きですが、日本も大好きです。国際日本学部には国際化を意識した取り組みも多く、世界へ飛び出すことを目指している同級生もたくさんいます。私は日本でなにか社会に貢献できればと思っています。5年後はオリンピックが開催されるビッグイヤー。東京だけでなく、日本全体のターニングポイントになると思います。一方でより少子高齢化も進行すると思います。その環境下で、私の力を活かして、日本を活性化させるような取り組みができていたらいいなと思っています。



■先生

5年後は53歳ですね。スウェーデン社会研究所の所長として、日本とスウェーデン、北欧の交流をより活発にできるように貢献したいと思っています。2年後には日本とスウェーデンの国交150周年を迎えます。昨今、雑貨や家具、旅行などの分野でかなり日本におけるスウェーデンをはじめ北欧への注目度は高まってきたと感じていますが、もっともっといろんな方法で関心を高めていきたいと思っています。

国際日本学部で教鞭を執っていると、「今年は本当に良い学生が集まったな」と毎年のように感じます。今年をピークとすることなく、今後もよりよい学生たちを迎え、送り出せるように、私自身が講義の内容を考えていきたいと思っています。それに加えて、産学連携も推進したいですね。産学連携というと理系学部とメーカーで新製品を創り出すというケースがすぐに思い浮かびますが、それとはまた違った、文系ならではの、国際日本学部ならではの形、企業との組み方を模索していきたいと思っています。

■卒業生

私は目標であるインバウンド業務に携わっていたいというのが最大の目標です。といっても、まだまだ5年では経験が足りないと思いますから、インバウンド業務に就いた時に役に立つ経験を積んでいけるよう、意識しながら日々の業務に打ち込みたいと思っています。現在は、すでに作られた企画に沿ってお客様を案内する添乗員の業務がメインです。5年後には、添乗員として世界を回った経験を活かし、多くの人に、まだ知られていない海外の魅力を感じてもらえるツアーの企画ができる立場にいたいと思っています。欧州担当なのは変わらないと思いますから、明治大学国際日本学部で学んだことをより活かしながら働いていきたいです。

●高校生へのアドバイス

高校生へのメッセージをお願いします。

■大学生

私は高校生の頃、国際的なことに興味が無く、海外へ行くことはもちろん、海外の方とコミュニケーションをとる機会も持ちませんでした。でも、北欧に興味を持ち、この学部に進学することを決め、実際に学んでみると、海外のことを知るということは、視野を広げ、自分の可能性を広げることに繋がると実感しました。知れば知るほど、新たな可能性を感じることができるんです。ですから、高校生の方には、自分の可能性を拡げるためにも、貪欲に世界に目を向けて、積極的に行動し、情報収集をすることをおすすめします。

■卒業生

私は高校に入ってから勉強が楽しいと感じるようになったんです。それまでほとんど勉強をしてこなかったのが、いざ「明治大学国際日本学部に進学したい」と思った時には、偏差値が20近く開いていました。でも、やりたいこと、目指したいことが明確だったので、それに向けて努力ができました。なにより勉強を楽しめたので、あきらめようと思うことが一度もなかったんです。テストの結果や偏差値で、いろいろな人が進路や将来の夢について賛成や反対の意見を言うことがあるでしょう。でも自分がやりたいことがあるなら、あきらめずに取り組めば、きっとその努力は何らかの形で報われるはずですよ。それを信じてがんばってください。

■先生

高校生には「英語をがんばってください」と強く言いたいですね。英語は、受験のために勉強する科目ではなく、世界とコミュニケーションを取るためのツールなんです。そのことは、文系理系関係なく、どこの大学のどの学部に入っても、実感することになります。特に単語は、早いうちからがんばってたくさん覚えておくと、それだけ表現の幅が広がります。つまり、自分がコミュニケーションできる世界が広がるのです。

私は、高校3年生の夏まで「卒業したら実家の家業を継ごう」と思っていました。でもあるきっかけで外交官になりたい、と思うようになったんです。外交官になるためには、学歴が重要と知りました。「それなら東大を目指さないと」と思ったんです。その時の合格判定は5%未満でした。でも、そこからスタートして、描いた夢を目指して、1浪して合格を果たせました。その時に私を支えてくれたのも、英語でした。

最終的には外交官とは違う進路に進んでいますが、一貫して英語は常に私を支えてくれています。ぜひ受験だけに焦点を当てるのではなく、将来まで見据えて、英語に取り組んでもらいたいですね。

●インタビューに答えていただいた方々●

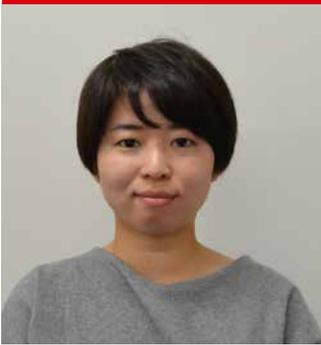


■先生

鈴木賢志先生

明治大学国際日本学部 教授

私立明治大学付属明治高等学校出身。東京大学法学部公法学科卒業。東京大学卒業後、株式会社富士総合研究所に3年勤務。その後、英国ロンドン大学で修士課程修了、ウォーリック大学で博士課程修了。ストックホルム商科大学欧州日本研究所に10年間勤務し、2008年より現職。2015年より、一般社団法人スウェーデン社会研究所所長。



■卒業生

濱本春奈さん

クラブツーリズム株式会社勤務（2015年度取材当時）

私立千葉敬愛高等学校出身。明治大学国際日本学部国際日本学科卒業。海外からの観光客を誘致するインバウンド業務に携わりたくて旅行会社への就職を志望。現在、シニアのお客様向けのヨーロッパツアーに随行する添乗員として活躍。将来は、海外の人に日本の良さをアピールできるツアーを企画し、多くの人に喜んでもらうのが目標。



■大学生

石田葵さん

明治大学国際日本学部国際日本学科3年生（2015年度取材当時）

私立普連土学園高等学校出身。高校生の時に愛読していたマンガが明治大学国際日本学部入学のきっかけとなる。社会制度や文化が取り上げられていたそのマンガを通してスウェーデンに興味を持ち、スウェーデンのことを学べる大学を探しているうちにたどり着いたのが鈴木先生の研究室だった。